

# 人間総合研究センター主催 「人間科学研究交流会—Current Topics in Human Sciences—」記録

## 第44回

話題提供者：阿部 廣二

演 題：いつなら飲んでも良い？ 「会話」と「飲むこと」の相互行為的調整

開催日時：2019年10月9日, 18:00～19:00

開催場所：100号館第1会議室

飲むことは、水分・栄養摂取や休息を取るなど、我々の生命維持活動と不可分に結びついた活動である。したがって、一見すると、我々の社会生活とは関係のない、些末な振る舞いのように見える。その一方、飲むことは、飲み会やお茶会、喫茶文化のように、飲むことはある種の文化的事象として、社会や文化、コミュニケーションと結び付けられて考えられてきた。

社会学者のHabermasは、コーヒーハウスでのコミュニケーションに、民衆の政治参加の可能性を見ていた(Habermas, 1989)。また、人類学的な観点から、飲み物と文化の関係を記述した研究も存在する(Manning, 2012)。これらの研究は、飲むことが、生理的な現象のみならず、社会・文化的な現象であることを示している。

今回の報告では、社会文化的事象として飲むことに着目しながら、よりミクロな現象として飲むことを捉えなおすことを試みた。すなわち、飲むことを、政治参加や各国の飲料文化のような社会・文化的事象としてのみならず、我々の具体的な相互行為のなかでどのような役割を持っているのかを検討した。

近年、社会学／認知科学の相互行為研究は、相互行為における非言語的要素の重要性を明らかにしている(例えば、Goodwin, 2013；平本・高梨, 2015)。こうした非言語的要素の一つとしての、「飲み物を飲むこと」という振る舞いは、我々の相互行為にどのような影響を与えるのだろうか。

この問いには、相互行為の参加者が、いつ、どのように飲み始めるのかをつぶさに観察することで答えられるように思われる。先行研究として、團(2018)がある。團(2018)は、相互行為分析の観点から、我々の会話の順番交替(Sacks, Schegloff, Jefferson, 1974)と飲むことの関係について分析し、話者が自らの順番中という位置で飲み始めることで、その順番の終了をマークすることを例証している。この知見は、飲むことが、我々の会話に直接的に影響を与え、とりわけ順番交替の組織化に関与することを示している。

本報告でも、この團(2018)の示唆を踏まえ、相互行為中の順番交替と飲むことに関する分析を紹介した。とりわけ、3人以上が参与する日常会話場面において、話者が曖昧になっている場面において飲み始める事象に着目した。抜粋1は、同郷の若者3名が、Tの就職先の場所について話している会話場面のものである。1行目において、Tが、「だるま」という場所についてわかるかどうか、MとWに確認している。その確認に対してすぐに確認が与えられず、2行目でTが情報の追加を行うが、その途中で、WとMが、理解したことを示している(03, 04行目)。このように、参加者が先行する発話に対してなんらかの理解を主張した場合、その後の位置で、理解を立証することがある(Sacks, 1992；平本, 2011)。05行目のWの確認要求は、そのような理解の立証に志向したものであるといえよう。

- 01 T: な(ん)かだるまあんじゃん?  
 02 T: なつま[つりやるところ そうそうそう  
 03 W: [あ:::[うんうん  
 04 M: [ああ あ::あ:::  
 05 W:→ だる[まプラザあ? ((この発話が終了するあたりでMが飲むことを開始))  
 06 T: [あの通りに  
 07 (0.42)  
 08 T:→ だるまぷらざ たぶ(ん)そのとなりすぐとなり  
 09 W: ああ  
 10 T: だるまあるところのすぐなりにい  
 ((この順番の冒頭「だるま」の位置で飲み始める))

抜粋1. 話者が曖昧な位置での飲むこと

## 「人間科学研究交流会」報告

しかし、ここで理解を示していたのはWだけではない。Mも理解を示していた（04行目）。つまり05行目は、Mも理解の立証に関わる発話を産出し、話者になる可能性のあった位置であるといえよう。この位置において、MはWの立証開始を確認できた後の位置で、ペットボトルを口元に持っていき始めている。この振る舞いを通して、Mは、しばらく口がふさがり、発話できないことを示しているように思われる。すなわち、話者になる可能性がある位置において、飲むことを開始することで、自らが話者でないことを示していると考えられる。團（2018）は、飲むことで自らの順番の終了をマークすることを例証したが、以上の分析知見は、話者ではないことを示すためのデバイスとしても、飲むことが利用可能を示唆するものである。

我々の相互行為は、飲むことを始め、多様な活動との関係のなかで、秩序だって組織されている。近年の相互行為研究においても、多様な活動との関係を捉える研究が蓄積されつつある。こうした活動間の秩序の解明を勧めていくことで、我々の相互行為を支える基盤についてのさらなる理解が得られるといえよう。

質疑応答では、ミクロな研究における記述の信頼性・妥当性の担保はどのようになされるのかなど、方法論的な観点の質問が寄せられた。従来の定量的な研究では、例えば

複数人でアノテーションを行い、その一致率を分析するなどの方法が捉えることが多かった。しかしながら、一致率は、分析者側の理解の妥当性しか担保されない。今回報告者が用いた相互行為分析の手法では、分析者のみならず、会話に参加している参与者自身がどのように理解したのかを記述することが課題となる。こうした理解については、先行する発話に対して、次の発話者がどのように応答しているのかの詳細を捉えることで記述可能であると考えられる。また、同様の事例をコレクションし、その中に何らかの体系性を見出すことができれば、妥当性の担保になるといえよう。

## 【参考文献】

- 團康晃（2018）話すこととのむことの相互作用分析. ソシオロギス, 42, 18-36.
- Habermas, J., 1989. The structural transformation of the public sphere. An Inquiry into a Category of Bourgeois Society. Polity Press, Oxford.
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. Language, 50, 696-735.